

モンゴル民族の教育

——文化的観点からの考察——

宝 力 嘎 (ボラグ)

は じ め に

近年、日本では「荒れる子」や「キレル子」など、子どもの内面の異変が際立つばかりでなく、子どもによる凶悪な犯行も跡を絶たない。このような現象の背後には、伝統的なしつけの衰退があるが、その伝統的なしつけの衰退は、人々の宗教心の変化や伝統文化の軽視などの問題と深く関わっている。

このように、子どもの問題は、子どもだけの問題ではなく、大人の人間観やその時代や地域の宗教や文化のあり方と深く関わっているゆえに、子どもの問題とこれらの問題を関連付けることなしには、その対策や解決を見出すことはできないのである。

本論文では、このような問題意識から日本の教育の現状と対比しつつ、モンゴル民族⁽¹⁾の教育を取り上げ、モンゴル人は、宗教や伝統文化の中でしつけや体罰をどのように考え、それらが人間形成においてどのような役割を果たしているのかを考察する。

1. 宗教としつけ

遊牧生活を営むモンゴル遊牧民の生活は、テンゲル（天）から降る雨、ガジル（地）に生える草といった大自然の恵みによって成り立っている。ある時は雨がよく降り、草がよく生え、家畜が増える。またある時は、寒波などの災い

で家畜が全滅し、人々の命まで奪われる。遊牧民にとって、大自然とは近くて遠い存在であると共に、優しくて恐ろしい相手でもある。そのため、モンゴル遊牧民は、一方で自然を敬い、他方で自然と闘っている。その闘い方は、自然を自分の力で組み伏せ、変えてしまおうとする闘いではなく、自然の猛威をどのように避け、自然とどのように調和するかという闘い方である。このような自然との関わりがモンゴル人の宗教と生活に様々な影響を与えている。

宗教的な考え方としては、モンゴル遊牧民は大自然の諸現象を故郷の神々の意思や働きによるものとみなし、故郷の神々を敬うことによって自分たちの生活を安定させようとする。その中で最も敬われる相手は「テンゲル」(天)と「ガジル」(地)である。チンギス汗がモンゴル帝国を築いた後、ヤサ法(憲法に当たる)の中で「大地に穴を掘ったりしてはいけない。屠畜の際、大地に血をつけてはいけない。」⁽²⁾など大自然の規律を守る法律を作ったのもこのためである。今日、遊牧民は草原においても、ゲルの中でも、酒を飲む前に右手の薬指に少し酒を付けて上と下に向けてはじく習慣がある。これは、上にあるテンゲル(天)と下にあるガジル(地)に酒を捧げることであり、日本人の「いただきます」に相当する。太陽が昇る時も、ミルクやミルクティを太陽やテンガル(天)やガジル(地)に捧げるといった習慣が日常的に行われている。このように自然と宗教の関係が人間形成にも深く関わっている。これをまとめると表1のようになる。

表1 モンゴル文化における自然・宗教・人間

	自然	宗教	人間
A	テンゲル(天)	神たる天	頭(理解)
B	人間	人間	こころ
C	ガジル(大地)	ナプトグ・サプトグ(精霊)	身体(体得)

上記の表1のA, B, Cのバランスが大事である。大自然の場合、テンゲル(天)から降る雨とガジル(地)から生える草によって家畜が増え、人々の生活が成り立っている。テンゲル(天)から雨が降っても、栄養豊富なガジル

(地)がないと、雨による洪水の災害が起こるだけである。逆に、栄養豊富なガジル(地)があっても、雨が降らないと草が生えない。そのため、モンゴル遊牧民は、四季折々に移動することによって、また、神たるテンゲル(天)や故郷の精霊であるナプトグ・サプトグを崇めることによって、自分たちのまわりの生態系を守るのである。人間の場合、物事を頭(知育)と身体の両方を持って理解する必要がある。つまり、頭は理論的なことを覚え、それを身体によって体験し、体得する。これが、後にのべる「アラガン・ボオブ」を容認する原理である。

この宗教的な考え方が、モンゴル人の子どもの名づけ方にもあらわれている。通常、遊牧民の名前には故郷の山や川などの大自然に因んだ名前が多く見られるが、「バラス(虎)」「ネルグイ(名前無し)」「ヘンチビシ(誰でもない)」「バガラン(糞垂らす子)」「モウ・ノハイ(悪い犬)」などの変わった名前も時々見られる。これは、人々が、悪魔が子どもを連れて行かないように願った名残である。つまり、昔は衛生や栄養状態が悪いために、多くの子どもが生まれてまもなく死んだが、人々は、これを「悪魔が子どもを連れて行っている」と考え、これを防ぐために自然界の汚いモノや人間らしくないモノに因んで名付けをしたのである。

このようなモンゴル遊牧民の宗教観に基づいた固有の習慣が子どもへの教育(しつけ)となり、「習慣は第二の天性なり」として次の世代の心を形成する大きな要素となっている。ここで、信仰に由来する習慣が子どもの教育(しつけ)と深く関わっている例をあげる。

モンゴル人は「石や道に排泄するとお尻に瘤ができる」^③と子どもに教える。この教えには次のような意味が含まれている。草原ではトイレがないため、外で排泄するのが普通であるが、必ず指定された方向(主に北方)を向いて、指定された場所でしなければならない。モンゴル人は、故郷のナプトグ・サプトグに属する石や道などに排泄することを堅く禁じている。だが、好奇心にあふれる子どもが「石や道に排泄することはいけないこと」とであると理解することは難しい。そこで「石や道に排泄するとお尻に瘤ができる」としつける

のである。子どもにとっては、尻に瘤ができることは嫌なことなので、石や道に排泄しないように気をつけるのである。こうして1つのしつけが成立する。実はこのしつけにもう1つの意味がある。モンゴル人は遊牧中に、外でご飯を作る際、3つの石を3角の形に置き（神である大地を掘って竈を作ることが禁止されているから）、その上に鍋を置いて、火を点すのである。もし子どもが石に排泄していたら衛生上よくない。また、道は公衆のものであり、人が通るものであるから、その上に排泄してはいけないのである。これらを一々しつけると子どもにはうるさく感じられるので、簡潔な諺のような教えによって効果的にしつけるのであり、その結果、信仰心と結び付いた習慣として身に付くのである。

2. モンゴル伝統文化の特色と人間観

モンゴル人は遊牧生活や「モンゴル帝国」が多くの民族を統治したことにより、常に異文化と遭遇してきた。しかし、モンゴル人はこうした異文化を全面的に受容するのではなく、「部品として」取り入れて、モンゴルならではの独自の伝統文化を作り上げてきた。今日のモンゴル人は、かつてのモンゴル帝国の地理的空間に分散して生活しているが、家畜を放牧するという共通点には変わりがなく、今日に引き継がれている。特に、「モンゴル」や「内モンゴル」においては、家畜を放牧する生活が広く残っている。このことを踏まえながらモンゴル文化の特徴をあげる。

モンゴル文化の第1の特徴は、簡素さである。この簡素さという要素は、モンゴル人の生活全般にあらわれている。モンゴル遊牧民のような移動を基底においた生活では、累積的な富の貯蓄はおのずから制約される。そのため、モンゴルでは、農耕社会のように富の偏在が起らないのである。このような意識や価値観に基づき、モンゴル人は「千両を貯蓄するより、千人の友人をつくれ」「（親からの財産よりも）親が健在の時には、多くの友人を紹介してもらうこと、駿馬がいる時には、見聞を広めておくこと」などの慣用語を用いて子

もをしつけることが日常的である。また、歴史的にも、モンゴル遊牧民は、自らすすんで自分たちの存在を誇示するような痕跡を残そうとはしなかったことも、その簡素さのあらわれである。

モンゴル文化の第2の大きな特徴は、自然に人手を加えることなく、所与の生態系をそのままの形で利用しながら生活のサイクルを保ち続けることである。つまり、モンゴル人を取り巻く自然環境は、公園のような人工的に作った環境ではなく、家畜が自然の牧草を食べ、糞が肥料になるといった循環が保たれており、そこには、人手が殆ど加わることがない。この自然な循環を重視する考えが、子どもの教育にも見られる。モンゴル人は子どもの自然な成長を重んじ、子どもとは「育てる」より「育つ」ものであると考えている。しかし、このように「育てる」より「育つ」ことを重視することによって、子どもが愛情に飢え、子どもの精神世界に大きな穴が開く場合がある。

第3の特徴としては、モンゴル文化においては、逞しさが重視されるということである。モンゴルは、標高およそ1000m前後の草原から成り立ち、中央部は砂漠が広がり、降水量が少なく、寒暖差が激しい乾燥地帯である。モンゴル人はこのような土地で遊牧や狩猟をし、転々と移動する生活を送ってきた。モンゴル高原の四季は、夏と秋がたちまち過ぎ去り、白魔の冬と砂嵐の春が長く続く。このように決して快適とは言えない自然環境の中での生活は、そこに暮らす人にとっては生き残るための闘いである。それゆえに、男女を問わず、幼い頃から乗馬、家事の手伝いや家畜の放牧などの「労働（この場合、子どもを鍛えるためだけではなく、実際の労働者としての必要性もある）」を体験し、「闘争心（生きる力を意味する）」を養う。しかし、「闘争心」を身につけることによって、譲り合う習慣が身に付かない恐れもある。

第4に、モンゴル人は、昔の人の教えや名言を重視する。特に、家庭教育では昔の人の教えや名言が、「口伝」として今日でも活かされている。祖父母や親が、神話を用いて、子どもに地縁関係や家族系図などを教え諭し、祖先の箴言・名言やことわざを用いて、子どもを勧戒してきたのである。

第5に、遊牧民の飼育している牛、馬、ラクダ、羊、山羊といった5種類

の家畜が、モンゴル人の人間観に独特な面をもたらしている。まず、子どもが子羊などにミルクを与え、可愛がり、戯れ、その死や別離に立会い、悲しみにくれることは、人間と家畜の間に独特の相互関係が作り出される。家畜との触れ合いによって、子どもは楽しみ、喜び、怒りなどの感情を日常的に体得する。また、家畜の寿命が人間に比べて短いため、子どもは命の儂さをより身近に実感するのである。日本人が桜や蛍を愛で、浮かんでは消えるものを眺めながら命の儂さをうたい、別離の痛みを嘆くことに比べると、モンゴル人の家畜との接触から実感する命の儂さは、子どもにとって、より現実的で強い印象を与えるものであると言える。家畜との接触は、モンゴル文化における生命教育の一環なのである。また、遊牧民の子どもは、幼い頃から家畜の世話を手伝い、家畜の子と遊びながら育つので、家畜の性格や特徴が子どもに影響を与えたり、主人の性格が家畜に移ったりすることがある。

それでは次に、家畜のそれぞれの特徴が子どもの感情にどのような影響を与えるのかをみてみよう。牛は大人しい性格の持ち主だと言われる。馬は人間になつきやすいし、心優しい信頼できる友のような存在である。ラクダは単独で行動するのが好きで、何事にも無関心な家畜である。羊は殺される瞬間も抵抗することができない大人しい家畜である。山羊は狡賢くて、よくいたずらをし、主人に叩かれる家畜である。

モンゴルの親は、家畜のこれらの特徴をあげ、子どもをしつけることが多い。例えば、動きが鈍く、何事にも遅い子どもに対して、「早く動かないと牛になっちゃうよ。牛になったら売られてしまうよ」としつける。あまりにも個性的な子どもに対しては「ラクダみたいに単独行動を取ったら、いつか迷子になるよ」としつける。大人しくて、泣き虫の子に対しては「お前は羊じゃなく、人間だからもっとしっかりしなさい」としつける。腕白で、常に動き回る子どもに対して「山羊みたいに動き回っていたら、お父さんに叩かれるよ」としつけるのである。

また、家畜の放牧に用いる技術が、子どもの教育に転用されることもしばしば見られる。例えば、モンゴルでは、羊と山羊は必ず一緒に放牧する。という

のは、身に危険が迫った時に危険を鋭く感知できる山羊が、羊を誘導する役割を果たすからである。逆に、山羊だけを1つの群れにすると、山羊同士の集団いじめが絶えなくなる。山羊を羊と一緒に放牧すると、山羊だけが固まらなくなり、いじめが自然におさまるのである。このようないじめ対策が子どもの教育にも見られる。

3-1. モンゴル語における「ソルガル（しつけ）」の語義

日本語の「しつけ」の一番適切なモンゴル語の訳語は「ソルガル」であり、「しつける」は「ソルガーフ」である。但し、この「ソルガル」という言葉の持つ意味は、日本語の「しつけ」に比べて意味する範囲が狭い。例えば「ソルガル」には、赤ちゃんの排泄などの生理的なしつけは含まないことが多い。

ところで、表音文字であるモンゴル語は、一文字が母音と子音の綴りから成り立っている。長い綴りの文字の場合、語幹と語尾に分けられることが多いので、その語幹と語尾の持つ意味を探ることによって、文字が持つ本来の意味にたどり着くことができる。この方法で「ソルガーフ（しつける）」を分析してみよう。

「ソルガーフ」は、語幹が「ソル」で、語尾が「ガルガーフ」である。「ソル」とは本来、鞣しかけの皮のことであり、日本語の「皮（粗皮）」にほぼ等しい。「ガルガーフ」は「叩き出す」を意味する。すなわち、「皮（粗皮）を叩き出す」というのがソルガーフ（しつける）の語源である。

ここで、「粗皮を叩き出す」を、より詳細に分析してみよう。モンゴル人は昔から遊牧生活を営んで来た民族である。家畜は彼らの財産であり、家畜の乳を飲み、肉を食べ、皮や毛から服装を作り、馬や駱駝を乗り物にする。家畜なくしてはモンゴル人の生活が成り立たなかった。しかし、家畜を放牧したり乗り物にしたりするには、家畜をあらかじめ調教しておく必要がある。

家畜を調教する場合、家畜が暴れると肉体的に苦痛を与え、暴れなかった場合に身体的な苦痛を与えない、という方法が用いられることが多い。この場合に用いられる「叩いて懲らす」手段を、モンゴル語で「ソルガルガナ（粗皮を

叩き出す)」と表現する地域がある。つまり、粗皮をたたいて鞣すように、暴れる家畜を叩くことによって大人しくさせ、自分たちの生活に役立たせようとするのである。今日でも、一部の地域では、いたずらをする子どもに対して、「ソルガルガナ・シュ（〈シュ〉は強調する意味）」、すなわち、「叩いて大人しくさせるよ」と脅すことがある。

以上のことから分かるように、「ソルガーフ（しつける）」とは、そもそも家畜の調教（しつけ）に用いた言葉で、これが、後に子どものしつけに転用したものである。

3-2. モンゴル人のソルガル（しつけ）の特徴

家畜と関わりが日常的である遊牧生活において、「泣きながら一人前になり、なきながら家畜となる」という慣用語があるように、家畜の子の成長と人間の子どもの成長を同じように捉える傾向が、モンゴルでは、人々に定着している。また、モンゴル高原の厳しい自然環境の中で生きるには、遅く育てなければ子どもは生きていくことが難しい。こうしたことから、モンゴル人のしつけは厳しいが、次にモンゴル人のしつけの特徴をあげる。

第1に、モンゴル人のしつけの最も基本的な特徴は、身体の規律化である。つまり、教訓などの言葉より身体で覚えさせる訓練が重視される。勿論、言葉によるしつけが頻繁に行われるが、大人を真似しながら、身体をもって経験することが最も重視される。この「身体で覚えさせる」しつけが、昔は軍事訓練に傾いていたようである。ロブソン・チョイドン⁽⁴⁾は「古代のモンゴルの家族では、日常会話で弓と矢のことを中心に語る。それ以外は狩猟や軍事を重視する。そのゆえに、小さな子どもがいる家族では、親や兄が小さな子に弓をどうやって放つか、弓で獣をどうやって倒すかについて教える。（矢とお箸の形や持ち方が似ているから、お箸を使いながら矢の持ち方を練習させるため——著者）ご飯を食べる際、必ず右手で箸を持つようにしつける。」⁽⁵⁾と記している。後には、このしつけが、不可欠な労働力としての子どもの育成に用いられた。ちなみに、モンゴルの子どもにとって、労働と遊びは切り離すことが

できない。労働の中に遊びがあり、遊びの中に労働があって、このような過程の中から、子どもの役割分担が巧妙に大人の労働の中に組み込まれていくのである。

また、危険が多い草原では、子どもが冒険をして、命を落とさないために「身体で覚えさせる」しつけは不可欠である。「あの河の流れが速くて危険だから近づくな」と言っても、子どもは好奇心から河遊びをしてしまうかもしれない。だから、「もしあの河に近づいたらこんな目に合わせるよ」とお尻を叩くなど「身体で覚えさせて」おけば、子どもが河に近づく可能性が低くなるのである。この場合の「身体で覚えさせる」ことは、体罰とは本質的に異なるものである。その背後には、冒険をして、命を落とさないためには、多少の肉体的な痛みはやむを得ないという大人の「硬い愛」⁽⁶⁾があるのである。

第2に、モンゴル人のしつけの顕著な特徴は、親や年寄り、先生への「服従」を求めることである。これには儒教の影響が反映しているように思われがちだが、それよりも親や先生を含む年寄りは、子どもの通るべき道を先に通った人生の経験者であるから、尊敬すべきであるという単純、かつ当然の理由によるものである。したがって、モンゴル人は日本人のように年をごまかしたりすることがなく、むしろ相手に尊敬されるために、故意に年上のように振舞うことが多い。

この年長者に「服従」を求めるしつけでは、親が一定の規則や原則を明確な言葉で子どもに示し、子どもがそれに沿って行動することを要求する。その際、「何故してはいけないか」という説明はなく、子どもだから親の言うことに従うべきであるという態度で接することが多い。そのため、このしつけ方は、子どもの自尊心を傷つける場合がある。

第3に、モンゴルでは、大人、特に年寄りであれば誰でも、悪いことをしている子どもがいれば自分の子でなくでも叱る。つまり、子どものしつけを大人全員で行うという習慣が、生きている。その際、叱る側が「どこのだれの子か」「親の名前は？」と怒鳴っていることが多い。つまり、子どもが悪いことをしているのは、親がきちんとしてない、若しくは親のしつけがよくないから

であると考えているのである。したがって、モンゴルではしつけは、子どもの行いが一般の行動様式とずれることが親にとって恥ずかしいという立場から行われる。「腕が折れても袖の中に」という言葉は、モンゴル人が家庭の中のよくない出来事を外に出ないように耐え隠すことを美徳とすることを示している。

第4に、モンゴル人のしつけは、子どもの幼少期においては厳しく、青年期になると優しくなる傾向がある。このしつけ方は、本来は家畜に用いるしつけ方であり、これが後に子どものしつけに転用されたのであろう。つまり、馬や牛などは、子どものうちから乗り馴らしたり、牛車を引っ張らせたりしておかないと、大きくなって体力が付いた後に、乗り慣らそうとしても、暴れて人に害を与える恐れがある。人間も同様に、幼い時から子どもを一定の型にはめておかないと、1人前になった後にしつけようとしても、効き目がなく、反抗されることが多いからである。

第5に、モンゴルでは、子どもの役割分担、特に男女の役割分担を重視する傾向が強い。モンゴル社会で性役割のしつけの必要性を促したのは、やはり放牧生活である。家畜には馬や駱駝といった大型家畜もいれば、羊や山羊といった小型家畜もいる。だから、自然と女性より力強い成人男性の方が大型家畜の面倒を見ることとなり、女性や子どもが小型家畜の面倒を見ることとなる。例えば、荒馬を馴らすには体力と技が必要であり、その体力と技は一瞬にして取得できるものではなく、幼い頃から少しずつ身に付けるものである。それゆえに、男子には体力が必要な仕事が向けられ、女の子は裁縫、家事、乳搾りなどの仕事が与えられる。

第6に、遊牧民生活の単位は部族であって家族ではない。部族の団結の厳しい制約の下においては、家族的な生活はその意義を弱める。遊牧文化のこの特長に、ユーラシア大陸を馬で横切ったモンゴル帝国の輝かしい歴史が加わることによって、モンゴル人のしつけに独特な一面が加わった。それは、「モンゴル人の名を汚すな（狭義では、部族の名を汚すな）」「それぐらいのことに負けたらモンゴルの男じゃない」など、モンゴル人のプライドに訴えるしつけで

ある。つまり、モンゴル人は個別の所属集団より、民族全体に所属しているという意識が強く、世界のどこに行っても強い自己規制が求められる。これは日本人の「旅の恥は掻き捨て」とは正反対のものである。

しかしながら近年では、漢族や回族などの異民族との牧草地を巡る争いなどにより、「四足の狼より、二足の狼（人間）の方が怖い」として、これまでの自然と闘う心を養うしつけが、人と闘う心を養うしつけに変わってきたことも大きな特徴である。

以上の特徴を見れば、モンゴル人のしつけには、何よりも「自立」が強調されていることが分かる。ただ、自立は生きていく際に必要なものであるが、子どもには発達段階毎に、特有なものの見方、考え方や感じ方があるので、あまりにも早いうちから自立を強調すると、発達の各段階における楽しみがなくなり、ある意味、面白味に欠けた人生となってしまおうであろう。

3-3. モンゴル文化における体罰

体罰をモンゴル語で直訳すれば「イラン・ジャルハホ」となる。しかし、この「イラン・ジャルハホ」という言葉は、歴史小説や法律業界以外殆ど使われない。ならば、モンゴル民族の教育上〈体罰〉が存在しないかという点、決してそうではない。「教育的関係において、教育上の責任を有する者が、教育目的をもって、教育を受ける、もしくは養育される者に対して加える制裁行為のうち、直接・間接的に肉体的苦痛を与えるもの」⁽⁷⁾といった会意からすれば「アラガン・ボオーブ」「ドオース・グビフ」などのいくつかの言葉があり、言葉によって意味することが異なる。これらの言葉の持つ意味をそれぞれ詳しく見てみたい。

まず「アラガン・ボオーブ」である。「アラガン・ボオーブ」の「アラガン」は手の平の意味で、「ボオーブ」はお菓子若しくは、おやつの意味をする。つまり、「アラガン・ボオーブ」とは「手の平のお菓子」若しくは「手の平のおやつ」という原義を持つ。モンゴル人は悪戯をする子どもに対して「おやつの時間だ」と手の平で子どものお尻などに叩いてしつけることがある。この

しつけ方を「アラガン・ポープ」と名づけている。

ところで、モンゴル人に「アラガン・ポープ」というしつけ方の動機が以下のように捉われている。まずは、子どもがおやつを欲しがると同様に叩いてかまって欲しがっているという捉え方である。大人たちが子どもの呼びかけに応ずることなく話に夢中になっている場合、子どもが普段親から「してはいけない」と言われていたことをし、大人を自分に向けようとする。この行為が上記の捉え方の典型的例である。次は、おやつは子どもにとって補充食であると同じく、子どもを叩くことも子どもの成長にとって必要な「補充」であるという捉え方である。

前者の「アラガン・ポープ」に効き目がなかったら、今度は「トオース・グビフ」という手段が用いられる。

「トオース・グビフ」の「トオース」は埃の意味で「グビフ」ははらう（掃う）ことを意味する。つまり、「トオース・グビフ」とは「埃をはらう（掃う）」という原義を持つ。「アラガン・ポープ」に比較して、定期的に、しかも力強く叩くという意味が含まれている。このしつけ方にも2つの捉え方がある。

まずは、子どもが悪戯などの悪いことをしているのは、子どもの体に悪魔がくっついているからだ。その悪魔を叩いてはらうことによって子どもが普段通り大人しくなるという捉えである。非科学的、非民主的な行いであると言われるかもしれないが、モンゴル人の精神世界の支えとなって、それなりの役割を果たしていることは事実である。次は、埃をはらうことは綺麗にすることである。悪戯をする子どもを叩くことは「埃（悪）」をはらい、子どもを綺麗にしていることである。一見すると似ているものの、前者に宗教の色合いが濃く残っている。

なお、これらの行為が罰として加える行いではなく、悪い行為の自然の結果であるという認識が受ける側にも行う側にも、前提としてある。そして「おやつ」や「(埃を) はらう」は日常的な用語であるがため、人々に違和感を与えことなく、むしろ共感される傾向が強い。モンゴル文化において、子馬や子牛

が大きくなると叩かれて調教されることがなくなるのと同様に、子どもが大きくなるにつれ「アラガン・ポオブ」などを用いるしつけが行われなくなるのである。その意味で「ソルガル」も「アラガン・ポオブ」や「トオース・グビフ」も、文化が生み出した教育用語である。

お わ り に

本論文では、モンゴルの自然や宗教と関わらせながらモンゴルのしつけや体罰を考察した。モンゴルでは、人々の生活の礎である大自然や、大自然と深く関わる宗教観が今日でも生きており、宗教に基づく伝統的なしつけが今尚守られている。そして、その伝統的なしつけにより、大人と子どもとの間のケジメや男女の役割分担がはっきり分かれている。また、モンゴル人の生活において、顕著にあらわれているのは、家畜と人間の間におけるコミュニケーションである。家畜はモンゴルの子どもの教育（しつけ）に模範となる存在であるとともに、子どもに命の儚さを実感させる存在でもある。このような生活の中から、モンゴル語における〈しつけ〉や〈体罰〉という言葉が派生しているのである。

教育観の立場からみれば、モンゴルでは子どもは「育てる」より「育つ」ものであるという考え方が強く、また、罰することを最も有効な教育（しつけ）手段として用いる傾向がある。子どもの教育にとって、「育てること」と「育つこと」の両方がバランスよく働くことが大事である。また、賞罰は、一方のみに偏るべきではない。善をほめて悪を罰さなければ善は進まず、悪は懲りないからである。教育においては、むやみに褒め、みだりに罰を加えることは避けるべき行為である。

モンゴル民族の教育と今日の日本の教育を比較すると、今日の日本においては、子どもを「育てること」と「褒めること」に偏しているのではないかと思われる。モンゴルの教育も現在の日本の教育も、よい点とともに修正しなければならない点を持つが、これらについては、さらに研究を深め、次の機会に論

じることとする。

註

- (1) 世間ではモンゴル＝モンゴル国というイメージがある。しかし、現在モンゴルと呼ばれている人々の居住地域は、いくつかに分断されている。それらは、独立国であるモンゴル国、ロシア連邦内のブリヤード共和国とカルムイク共和国、中国領の内モンゴル自治区と新疆ウイグル自治区である。このほかにも、モンゴル人は、中国領の青海省、雲南省などに分散集中的に居住している。本論文におけるモンゴル人とは、「モンゴル国」及び「内モンゴル自治区」において、家畜を放牧することによって生活を営んでいるモンゴル人のことをさす。そのため「モンゴル民族」と言う表現を使うことにしたのである。
- (2) ダムバ編著『モンゴル歴史教材』、内モンゴル大学出版社、1998年、115頁。
- (3) ノルブバーザル、N・エンケ著『モンゴル民族の伝統的な教育』、内モンゴル科学技術出版社、1997年、240頁。
- (4) 近代モンゴルを代表する進歩主義者、1907年10月から1911年7月までお雇い外国人として東京外国語学校にて教鞭をとる。
- (5) ロブソン・チョイドン著 H・ダンビジラソン注釈『モンゴル風俗鑑』、内モンゴル人民出版社、1981年、101頁。
- (6) モンゴル人は「愛」を大きく2つに分けることが多い。1つは、「硬い愛」といい、子どもの将来を思うあまり、子どもに厳しい態度をとったり、手を出したりすることをさす。もう1つは、「柔らかい愛」といい、子どもといつも優しく接することをさす。一般的には、このような「硬い愛」は父子の間に見られるが、母子、男女や上司や部下の間にも見られないこともない。
- (7) 細谷俊夫、奥田真丈、河野重男、今野喜清編『新教育学大事典』第5巻、第一法規、平成2年、76頁。